

にしまつやまとうげ
西松山峠窯跡

所在地 所在地 瀬戸市北松山町
(北緯 35 度 14 分 13 秒 東経 137 度 04 分 47 秒)
調査理由 特殊改良一種工事国道 155 号
調査期間 平成 18 年 6 月～ 8 月
調査面積 750 m²
担当者 小澤一弘・宇佐見守・永井邦仁



調査の経過 発掘調査は、国道 155 号特殊改良一種工事の事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。山林伐採と地形測量ののち発掘調査を実施した。

立地と環境 瀬戸市今地区と水野地区を結ぶ国道 155 号が南北にのびる。その丘陵地を抜ける最高地点は切り通しの峠となる。遺跡は峠の西側山林（標高 122～128m）に位置し、道路との高低差は約 3m ある。付近には山茶碗焼成窯が点在する。

調査の概要 調査前、遺跡とその周辺は段々畑状の耕作地となっていた。既に窯体が滅失していたため、灰層の基点やその展開方向について全く予想がつかない状態であった。しかも耕作によって拡散したとみられる山茶碗や古瀬戸製品が広範囲の地表面で採取されたため、遺跡の中心が容易に把握できない状況にあった。そこで遺物散布範囲に対し調査区が設定された。

調査の結果、灰層が残存していたのは調査区内最高所となる西端の一角のみで、それ以外での遺物の出土は耕作や土砂流出による拡散であることが明らかとなった。残存灰層は調査区内で約 1×2m の範囲で、そこから西へ若干広がるものと思われる。基盤となる黄褐色砂質土層の上に炭化物の多い黒色土層があり、これは灰かき出しに伴うものであろう。さらにその上には複数の堆積層が認められるが、窯体が不明であるためこれら堆積層の成因については特定が難しい。なお、想定される灰層の範囲は、およそ南西方向から北東方向への下り傾斜に展開するであろう。

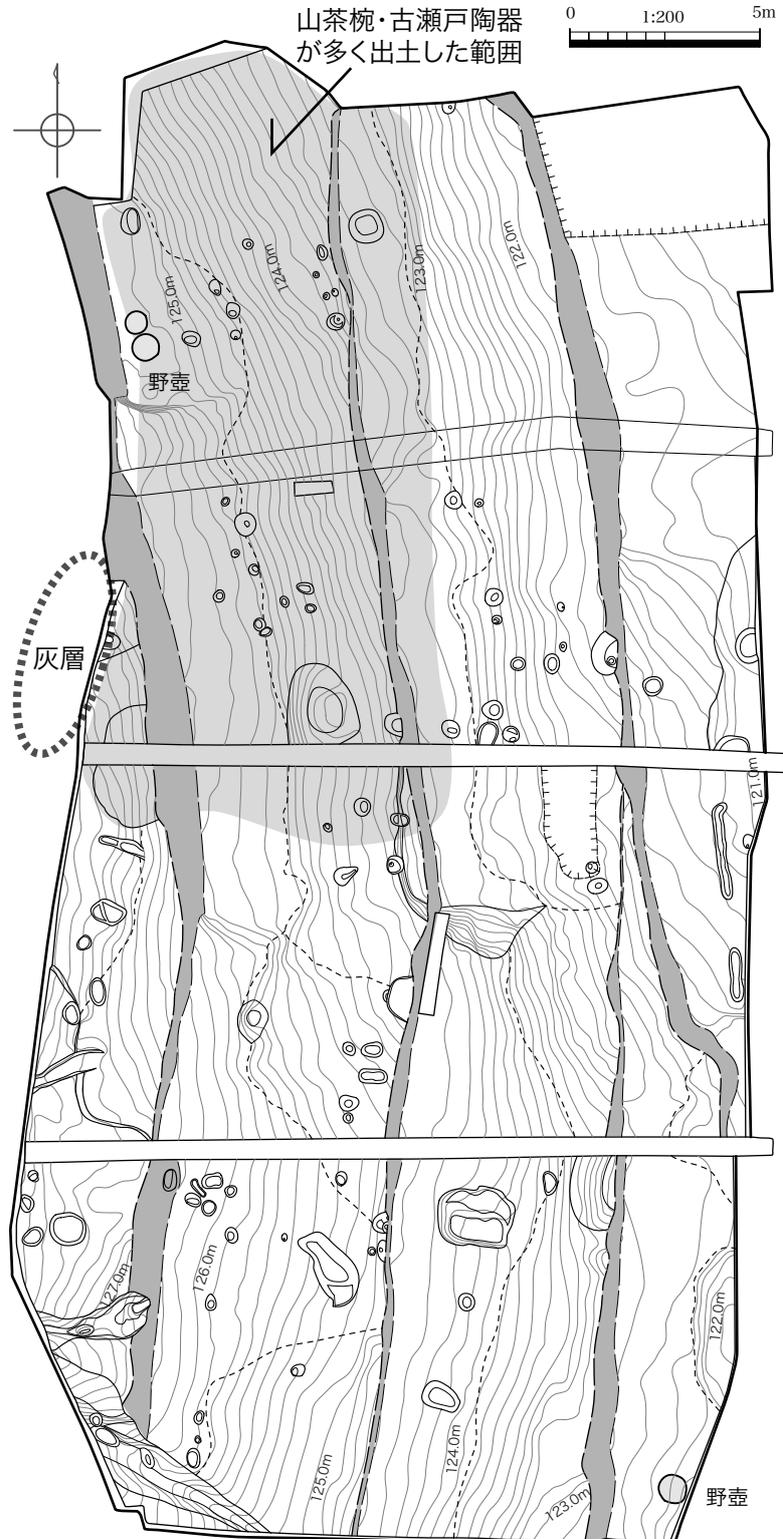
調査区南半部では、少なくとも鎌倉時代以降に発生した土砂流出の痕跡が確認できた。これは当初基盤層と思われた黄褐色土層内からも山茶碗片が出土したことによる。調査区より高所から下ってきた土砂がくぼ地に滞留し逆にそこが盛り上がった状態となっていた。ただここから窯体片は出土しなかった。このように比較的新しい時代に発生した土砂流出によって遺跡が滅失したり埋没したりする可能性は、瀬戸市域のほぼ全域で想定すべき現象であり、遺跡の有無および範囲確認に際しては注意を要する。

出土遺物は、山茶碗と小皿が主体で、調査区北半部では古瀬戸四耳壺が出土した。山茶碗は重ね焼き状態のものや、焼台が付着したものもある。高台のないものも含まれるなど、



調査区西端遺物出土状況

時期幅を想定しておきたい。焼台には青灰色が主体で明赤褐色のものが若干ある。遺物はコンテナ約50箱分あるが、これらを整理していくことで未知の窯について示唆が得られるものと考えている。
 (永井邦仁)



遺構配置図 S=1/200